

ダリマナ

～ 南の風 ～

校長室日記

令和元年5月25日(土)

第31号

《 学区大運動会に寄せて 》 「勝ちに不思議の勝ちあり 負けに不思議の負けなし」

勝負事に運はつきものだ。ただ、運で勝つことはあっても、負ける時には何か理由がある。スポーツの世界で名将や名選手と呼ばれる人が試合を終える度に実感するのが、「勝ちに不思議の勝ちあり 負けに不思議の負けなし」という言葉だろう。

勝ち偶然という要素が入り込むものと謙虚に受け止める。一方、負けを「運が悪かった」と片付けるのではなく、失敗には必ず原因があるのだから、それを突き止めて次に生かす重要さを説いている。

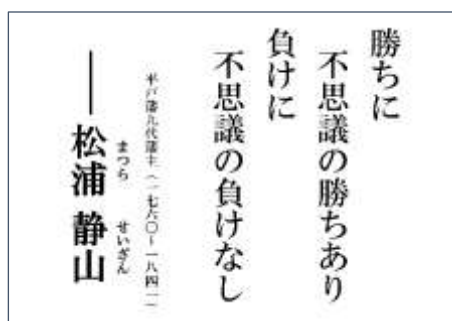
プロ野球往年の名捕手・監督、野村克也さん(82)が1980年代に「負けに不思議の負けなし」という本を出版し、自身も試合後の取材で、よく使ったことから「野村語録」の一つだと思われがちだ。

長崎県平戸市の松浦史料博物館学芸員、久家孝史さん(49)は「当館に来て初めて、平戸藩の9代藩主、松浦静山の言葉と知る人が多いですね」と笑う。静山が書いた剣術の指南書「剣談」の中にある言葉なのだが、いつ思いついたのか、その背景はよく分かっていないという。

静山は心形刀流(しんぎょうとうりゅう)免許皆伝の腕前だけでなく、学問も幅広く修め、蘭学や当時禁教だったキリスト教へも関心を寄せていた。「西洋の文化が早く伝わった土地柄からか、何事にも好奇心が強く、物事を突き詰めて考えるうちにたどりついた境地なのでしょう」と久家さんは解説する。藩主を長く務めた静山の気持ちに少しでも近づきたいと思い、平戸城の天守閣に上った。市街地から大陸につながる海まで四方をゆっくりと眺める。晴れていたこともあり、遠くの島々がくっきりと見えた。日本本土の西北端で、大陸にも近い平戸は鎌倉時代に元寇の襲来を受けていたことに気付く。「剣談」は静山が江戸で隠居していた時代に書いたとみられるが、「勝ちに不思議の勝ちあり 負けに不思議の負けなし」の言葉を思いついたのは平戸だったのではないかと。



松浦静山



民を治める者が侵略に備え、戦に勝つ極意を考えるのは当然だ。200年以上も前の剣術の心得が、今も語り継がれるのは、誰にでも分かる短い言葉で勝負の本質を表したからだろう。

読売新聞文化部記者 西條 耕一

♥ Happy Birthday 5/27..小林 史奈さん